

小笠原諸島における文化ツーリズムの可能性 ——観光資源としての言語景観

首都大学東京大学院 人文科学研究科 教授
NPO法人小笠原自然文化研究所理事

ダニエル・ロング

ことばは観光資源として考えられる。観光資源は、人間が作った「文化的観光資源」と人間が作っていない「自然観光資源」に分けることができる。パリのエッフェル塔や東京のスカイツリー、姫路城やピカソが描いた絵画『ゲルニカ』を目的とした観光は文化ツーリズムといえる。米国ノースダコタ州のマウント・ラシユモアや金沢の兼六園は見方によっては自然とも文化とも分類できよう。文化には有形と無形の両方のあるから文化的観光資源にもその両方がある。ブロードウェイの芝居鑑賞を目的にニューヨークを、あるいは御柱祭^{おんはしらまつり}を観るために諏訪を訪れる場合、それは文化的観光資源を活用した観光といえる。

見えない観光資源、ことば

言語も地域の「観光資源」として考えることができる。確かに「大文字焼きが見たいか



写真1 ギンギン（漁業関係者が履くサンダル）

ら京都に行こう」と同じ気分で『オオキニ』や『オイデヤス』と言われたいから京都に行こう」と言う人はいない。しかし、「あの時に耳にした穏やかな響きを持った京ことばが良かった」という記憶や感想を、京都へ旅した時の全体の旅行経験の一要素として挙げることはできる。日本各地で使われている標準語の「いらっしやいませ」に当たる奄美大島の「いもーれ」、南大東島や八丈島の「おじゃりやれ」、伊賀上野の「また来てだーこ」なども観光資源として活用されていることばである。

小笠原ことばの独自性

小笠原諸島の場合には「小笠原ことば」と呼べる言語変種がある。この用語は島で現在あるいはかつて使われていた標準語と異なる言い方を全て含む総称としてここで使っている。小笠原ことばといわれているほとんどの

単語はハワイ語や英語、八丈語（八丈島方言）などよその言語体系に由来する。そういう意味では小笠原固有のことは少ない。日本語の省略によるギョサン（漁業関係者が履くサンダル）や語源不明のウンボシ（タカラガイ）などはこれに当たる（写真1）。しかし、小笠原の自然の独自性は固有種だけではなく、よその地域にも生息している生物の独特な組み合わせ（生態系）にあるといえるように、小笠原ことばの独自性はその組み合わせにある。すなわち、英語とハワイ語、八丈語のそれぞれの単語が同一の地域で日常的に使われているのは、地球上で小笠原諸島だけである。

言語景観から見える島の生活文化

小笠原ことばが観光資源として使われている例は島を訪れたら見かける。集落を散歩しても、山に入っても、海岸で遊んでも、小笠原ことばが看板などの表示で使われる「言語景観」が目につく。

言語景観とは、

- (1) 公な場で
- (2) 受動的に視野に入る
- (3) 不特定多数に向けた
- (4) 文字言語

と定義づけられる。小笠原では木の和名、

写真2 ローズード
(ムニンヒメツバキ)



写真3 ルーベル
(ヒメフトモモ)

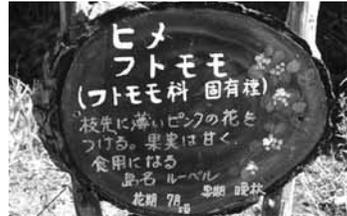


写真4 生態系の解説板に使われる小笠原ことば

科、学名といった情報が書かれている解説札には島名が表示されていることも多い。写真2は大神山公園にあるローズード（ムニンヒメツバキ）で、写真3は宮之浜道にあったルーベル（ヒメフトモモ）の解説札である。これらの謎に満ちた島名を見たことで島の文化に興味を持って調べた観光客は、ローズードは英語の rose wood（バラの木）、ルーベルは英語の blueberry のそれぞれが訛ったこと（なま）に由来することが分かる。山や海岸では、一本の木の説明ではなく、その生態系全体を解説している立て看板がある（写真4）。シュロ（オガサワラビロウ）の表示をきっかけにガイドは島の生活文化（木の利用方法など）について説明することがある。例えば、昔から島の屋根を葺くのに使われたこの木の葉をシロツパと呼んでいたのは、葉が枯れると白く見えるからだともいわれているがこれは民間語源説であり、実は「棕櫚」と書かれるシュロの木の名前がシロとなったのは、関東方言によく見られる「拗音の直音化」という音声変化現象である。同様に、「ヒデノキ（シママロ）」という島名は火が付きやすい特徴に由来し、昔はコックジョ（土間の台所）の釜の焚きつけに使われた「うんぬん」という生活習慣の話をするきっかけにもなる。

島民がつくる言語景観

もちろん小笠原ことばが書きことばとして現れるのは公園の公共表示だけではなく、レストランや食堂といった民間人がつくった言語景観もある。チギ(バラハタ)やアカバ(アカハタ)といった魚がメニューに載る時は、標準和名よりも島名で表示される傾向にある(写真5)。

料理名には、ピーマカやダンプレん、島ドーナツがあるが、外食の店ではあまり見かけない。それは別名が使われるというよりは、これらの料理そのものはあまり外食店のメニューに出されていないのが原因だ。私のような島外の人間はこういう島独特のものを食べたがるが、島の人に聞くとこれらは素朴な家庭料理というイメージがあり、はるばる「ナイチ」(本土)から来られたお客に出すわけにいかないと言う。言語学用語を使えば、ピーマカやダンプレんは「語形」そのものが独特だが、ドーナツという語形そのものは内地にもあるもので、独特なのはむしろ「語義」である。つまり、内地の想像する浮輪形のお菓子と違って、島ドーナツはテニスボールの大きさの球で、キーキの油揚げである。形も味もよく似ている沖縄のサーターアングギーと直

写真5 メニューにあるチギ(バラハタ)

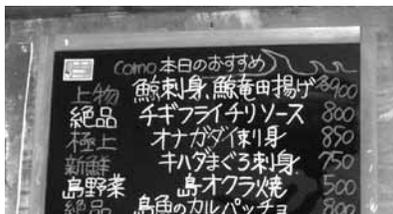


写真6 ピーマカ(酢漬けの魚)

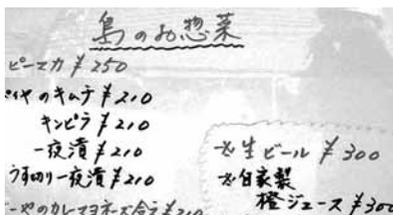


写真7 ダンプレん(西洋すいとん)

接結びついているかどうかは不明だが、小笠原のことば、料理、文化、音楽などにおいて沖縄の影響がほとんど皆無だということを考えると、むしろ偶然の一致の可能性が高いと思われる。いずれにしても、ダンプレんやピーマカ、島ドーナツという文字を見かけるのは島民を対象としたものが多い。写真6はスーパで販売されているピーマカの、写真7は夏祭りで父島婦人会が売るダンプレんの、それぞれの看板である。

歴史の軌跡を表すことば

祭りと言えば、東京都立小笠原高校の学園祭「ビーデ祭」も小笠原ことばである(写真8)。「ビーデビーデ(ムニンデイゴ)」という言い方はハワイ語のヴィリヴィリが複雑な音変化を繰り返してできた単語である。

小笠原ことばが、店や施設の名称に使われることもある。近年の使用例を挙げると、長期滞在者の宿屋「タマナ荘」や「パンとキーキの店たまな」「カフェ・グリーンペペ」「せーれー館」が思い浮かぶ。小笠原諸島で父島に次ぐ二番目に大きい島である母島では、民宿の「こぶの木」や「アンナビーチ」の看板や送迎車が目につく。島なので、数多くの船を日常的に見かけるが、船体に書かれている

「ウェントル2」や「アイツバラII号」のような小笠原ことばも見かける。

これらの名前に小笠原ことばの複雑な歴史が凝縮されている気がする。入植してきたさまざまな民族が話していた言語がそれぞれ表れている。タマナ（テリハボク）は一八三〇年代から住み始めたハワイ人のことば *tamana* に由来する。アンナは同じ時代から住み着いた英語圏人の *onion*（ねぎ）が訛った単語である。ウェントルも英語の訛語であり、冬の間でも島周辺で捕れる未成熟のウミガメを表す *winter turtle* に由来する。コブノキ（シマホルトノキ）やアイツバラ（スマ）は一八七〇年代に定住した八丈島民が持つべきた言い方である。グリーンペペ（光るきのこ）は一九七〇年代に新新島民（**迷**）が意図的につくった人工語である。そしてセーレー（仲間に入れて！）は起源が不明な謎の表現である。

言語に見る小笠原の時空間

小笠原ことばのなかには、地域独特な言い方として意識されていないいわゆる「擬似標準語」も含まれている。例えば観光客がスパーの前の「今便」という表示（写真9）を見かけたら、果たして指定されている期間がいつからいつまでか読み取れるだろうか。島



写真9 島の厩による「今便」という表示



写真10 商店の定休日「出港翌日」



写真8 小笠原高校のビーズ祭

独特の暦では、「曜日」よりも船のスケジュールによって生活のリズムが刻まれるので、商店の定休日から郵便局の「内地」（本土）行き郵便投函の締め切り日までは「月水金」で言い表されるのではなく「出港翌日」や「入港中」として表現される（写真10）。このように島でしか通じない「隠れた小笠原ことば」は時間だけではなく空間的表現にも現れる。「内地では……」と聞いた観光客は不思議がるかもしれないが、意味は通じる。一方、会話で「七時にセンマチで」と聞いた内地の人は、地図に表記されていないこの場所に辿り着くのは無理であろう。写真11のように漢字を使った掲示板を見て初めて、これは「船客待合所」の通称であることに気づくであろう。さて、ここで逆に小笠原ことばが使われない意味領域について考察したい。沖縄県各地ではメンソーレ、オーリトリ、ンミヤーチのような歓迎の挨拶ことばが目につく。小笠原と同じ東京都に属する伊豆諸島にはオジャリヤレ（八丈島）やおモウヨウ（青ヶ島）、ヨツチャレ（神津島）といった挨拶ことばが観光客向けに使われているのを見かけるが、小笠原には「こんにちは」や「いらっしやいませ」に当たる歓迎の挨拶が存在しない。その代わりに、別れの挨拶であるマタミルヨ（ま

たね！)が島特製のTシャツなどで使われることがある(写真12)。

魅力の幅を広げる小笠原ことば

小笠原ことばは観光資源として利用されていないものの、将来的にその活用が期待される分野がある。それは海のレジャー産業である。島にはダイビング、ホエールウオッチング、ドルフィン・スイム、シュノーケリング、釣り、無人島巡りや磯渡しなど、海を活用した娯楽が多いが、魚名以外に小笠原ことばが観光客に向かって使われることは非常に少ない。しかも、これはボートツアーの関係者が島の言い方を知らないというわけではなさそうだ。確かにこの業種には内地出身者は多いが、彼らの多くは島の漁師に早く溶け込み周辺の海の情報(海流の特徴、危険な水面下の岩や浅瀬、魚礁)を吸収しているので、たいして海に関する小笠原ことばを知っているのである。ただ自分のお客さんはそれらに無関心だと思ひ込んでしまい、彼らに向かって使いたがらないだけかもしれない。

ただ小笠原では独特の海関係のことばが多く使われているから、それを観光資源として生かせないのはもったいない。例を挙げると、ムグル(潜る)やさまざまなニユアンス

写真11 南洋踊り練習会は「船待」で



写真12 マタミルヨ(またね！)



を表現するブナムグル(勢いよく潜る)、ズナムグル(足がぬかるみにずぶとはまる)、ツナムグル(転んでうつ伏せになる)がある。自動詞のノモル(沈む)やその他動詞ノメル(沈める)では、例えば「アンカー(碇)早くブノメロ！」や「この錨はバランスが良いから、海に投げた時に海面に浮きもしないし、海底にノモリもしない」といった表現を耳にすることもある。カヌーのことを小笠原諸島でカノヤカノーと呼ぶのも、母島のロース記念館に行けば知ることができるが、島のガイドがこれを積極的に観光客に向かって使うことも「観光資源としての小笠原ことば」の有効な活用方法であるように思われる。突き棒漁で狙った魚に命中せず、錨が的外れた時に使われる「どんがらしちゃった！」も同様である。

今後、文化ツーリズムがますます盛んになっていくなかで、小笠原ことばを重要な観光資源としてどのように活用するか、具体的な提言が求められるであろう。

(ダニエル・ロンク)

(注)「新新島民」とは西洋や太平洋にルーツを持つ「欧米系島民」や戦前に八丈島など日本から入植した人やその子孫を指す「旧島民」、そして返還直後に移り住んだ「新島民」と区別される最も新しく移住して来た人たちのことを指す小笠原ことば。筆者編著「小笠原学ことばはじめ」に詳しく。